京新聞 (第3種

政治参加 ぐっと身近に

十日投開票の参院選に合わせて、上尾市立の三つの中学校で社会科の時間を利用した模擬投票が行われた。安全保障やウクライナ問題、物価高対策など、事前に生徒が考えた質問を十項目にまとめて国政の主な政党に送り、その回答を参考に投票した。参院選後の十一日以降に開票する予定だ。

（前田朋子）

模擬投票を行う生徒ら＝いずれも上尾市立上尾中学校で

上尾の3中学で模擬投票

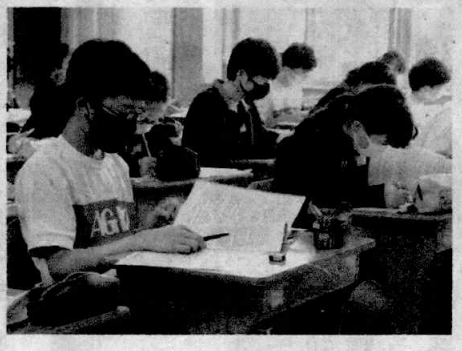
6党へ10項目質問、回答基に

参院選 埼玉 2022

「回答集は読めたかな。自分たちの考えをグループで共有してみましょう」。六日に模擬投票をした上尾中の三年三組。投票に先立ち担任の大野桂輔教諭（二八）が声を掛けた。生徒らは五、六人のグループに分かれて話し合い、「ジェンダー問題の取り組みがいい」「私立高校の無償化が気になった」と各党の主張を分析。「回答が長過ぎて全部読むのがきつかった」と正直な感想も漏れた。

ジェンダー問題に興味がある鹿嶋みらいさん（一四）は「元々いいなと思っていた政党より、ほかの政党の回答がいいと感じられたものもあった」と語る。若者の意見を政治に取り入れる仕組みを質問した皐山皓嗣さん（一四）は、コンビニ投票など投票方法の多様化を挙げた政党を「子どもの僕らにしっかり分かりやすく説明してくれてありがたい」と評価。沖縄の基地問題に関心がある大熊音惟（と）さん（一四）は「各党の対応を理解できてよかった」とそれぞれに関心を高めた。

架空の設定ではなく実在の政党に生徒が質問し、その回答を参考にして行う模擬投票は、大石中の佐々木孝夫教諭（六二）が考案した。昨秋の衆院選で同中で初めて実施。今回は新たに二校が加わり、大石中と上尾中の全クラス、上平中の一部のクラスの計約千七百人が参加した。質問は国政の主な六政党に送り、いずれも返答があった。



6党分、58ページの回答集を参照しながら投票に臨む生徒ら

「各党の対応理解できた」生徒の関心向上

若年層の投票率の伸び悩みについて、大野教諭は自身の力不足も感じていたという。「主権者教育として授業で何ができるか。引き出しやアイデアが少なく、まねでもいいからやってみよう」と佐々木教諭らの研究会に参加。各党の主張を文字どおり受け取るだけでなく、根拠を調べたり、実社会と比較してみるなど、学びをより深める方法に検討の余地はあるものの、「これまでの架空の設定とは違い、リアルに感じられたようだ」と生徒らの反応に手応えを得た。

佐々木教諭は今回、生徒らの質問が単なる問いではなく、自分たちの将来を「こうしてほしい」という意思表明になっていることに気付いた。模擬投票が若者の政治参加意識を高めるとともに、日ごろから「若い世代の問い掛けに政党が答えるのが当たり前の社会になれば」と期待した。